秋田県立博物館研究報告第23号　44～39ページ　1998年3月

資料紹介

「庚申之縁起」

高橋　正

一、はじめに

庚申信仰についての研究対象は、庚申塔と呼ばれる石像物、庚申講と呼ばれる講組織、庚申の由来と中国の思想との関係など多岐にわたっており、その研究史もまた膨大である。小稿では、その研究史について言及することはできないが、研究対象のひとつに「庚申之縁起」と呼ばれる縁起の分析があることは言を俟たない。秋田県内でも、ぬめひろし氏(1)、斎藤壽胤氏(2)、藤田栄子氏(3)の研究によって庚申縁起の研究が進展しつつある。小稿は、こうした研究成果に学びながら、庚申縁起のデータを蓄積するための基礎的作業と考える。

本資料は、秋田市在住の池田美博氏が所蔵する資料である。氏の家は現在は転居しているものの、江戸時代には豊岩の小山村（現在の秋田市豊岩字小山）肝煎をつとめており、その関連資料を所蔵している。この「庚申之縁起」もその一連の資料として保存されていた。

資料の内容は、庚申の由来と庚申待ちの作法を記したものであり、庚申縁起の類型からすれば、庚申の本地をといたもので、いわゆる「四天王寺系縁起」と呼ばれるものである。同様の資料は先述したぬめ・斎藤・藤田諸氏からの報告があるが、小稿の資料はこうした資料との、詳細についての比較検討が必要であること、書写年代（文化十三年）が明確であること、そしてこの縁起が伝わっていた地域がある程度確定可能であることなどの理由から、ここに資料の紹介をおこなうものである。

二、解　題

（装幀）小型本。縦二四・五　×横十六・五　×厚さ〇・七

（表紙）原表紙中央に「庚申之縁起」と記す。裏表紙　白色無地。表紙の綴りは、上下二ケ所に、それぞれ縦に二穴ずつ四箇所綴り穴をあけ、仮綴装。

（丁数）十丁

（内容）

本資料に記載されている内容を大別すると、

A、庚申の本地について

B、庚申の作法について

C、庚申の効力について

以上の三点である。従来報告のある縁起類と比較するとき、特記すべき内容をここにまとめる。

まずAの庚申の本地に関する内容であるが、大宝元年正月七日の庚申の日に天王寺の僧が帝釈天の使いとして庚申を広めたという由

*秋田県立博物館

来を説いている。この僧の名前について、秋田県外では「重善」「しゃうせん」「乗泉」などの報告例があるが(4)、本資料には「民部僧都」と記してはいるものの、特定の名前は記されていない。この点については他の県内資料も同様である。

次に、Bの庚申の作法についてであるが、まず供物が、夜半には「丸いもの」、暁には「赤飯・飯物・酒」である点が注目される。供物の内容については、従来報告のある縁起と同様だが、暁と夜半とで供物の内容を異にする点に特徴があると考える。また庚申の夜の禁忌事項として、睡眠、男女の媾合、四足二足・五辛を食することの三点をあげている。

Cの庚申の効力については、六地獄の苦しみを逃れることや三病を逃れること、さらには「一切諸願成就・皆令満足うたがひなし」と記されて入る。六地獄の苦しみを逃れることについては、他の縁起類と大きな違いは認められない。三病を逃れることについては、現状ではむしろ記述されて入るものが少ないといえる。その内容も、本資料では「らひ病・くち病・うへ病」となっているが、他の縁起では「癩病・癲病・狂病」と記す資料もある。(5)

さらに、本資料においては、縁起の最後に「後の世を　きけはとうきに　にたれとも　しらすやその日も　けふになりけり」という歌が添えられている点にも、他の縁起類とは異なる点を認めることができる。

三、凡例

(1) 本書の本文は、池田美博氏所蔵の「庚申之縁起」を底本とした。

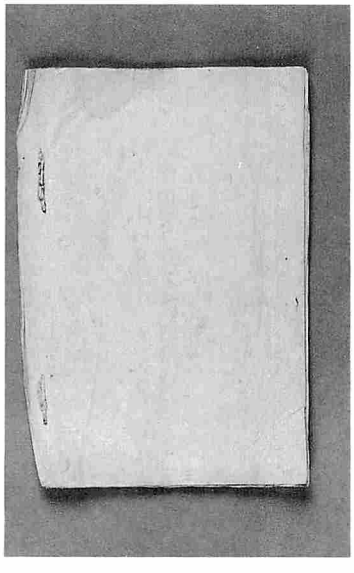
(2) 文字はすべて原文どおりとしたが、文意が分かりにくい箇所については、（　）を付して、該当すると考えられる用語を記入した。

(3) 底本には、句読点がまったくない。本来であれば、底本に忠実に翻刻すべきであるが、文意の解釈を示すという意味から、句読点を付した。

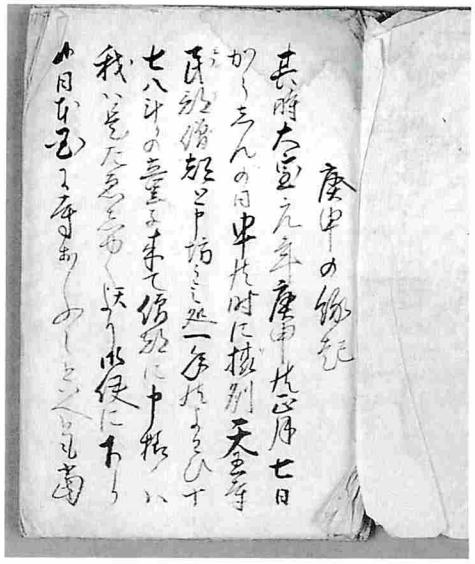
(4) 改行については、本文に（|）を記して示した。

(5) 資料中、下段の（）内の数値は、丁の番号を示す。

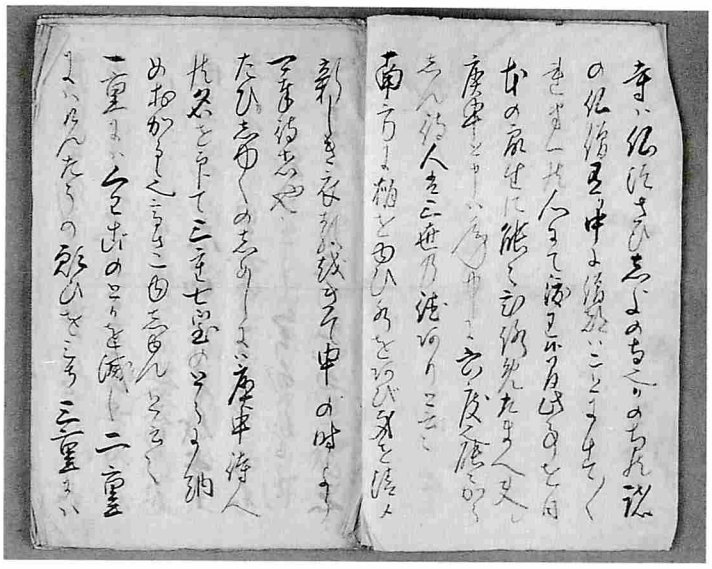
表　紙



裏　表　紙



第一丁　表



第二丁　表　　第一丁　裏

（表紙）

庚申之縁起

庚申の縁起

其時大宝元年庚申の正月七日」かうしん（庚申）の日申の時に摂洲（1）天王寺」民部僧都と申坊主の処へ、年のよわひ（齢）十」七八斗りの童子来て僧都に申様は、」我は是たえしゃく（帝釈）天より御使に下り」候、日本国に寺おふ（多）しといへとも当」寺は仏法さひしょ（最初）の寺なり、かの寺の諸」の仏僧あり、中に僧都はことにすく」れ第一の心にて渡り候間、此事を日」本の衆生に能々ひろめたまへ。夫れ」庚申と申は年中に六度也。能々かう」しん待人は三世の徳ありと云々。」南方に棚をゆひ、水をあび、身を清め、」新しき衣類をきて、申の（2）時より」可奉待者也。」たひしやくのしめしには庚申待人」の名を印て、三重七宝のとうに納」めおかるる也、高さ一ゆしゆん（由旬）と云々。一重にはくわご（過去）のとか（科）を滅し、二重」にはけんたう（現当）の願ひをみち、三重には」後生にて仏くわ（仏果）を得て、此とうに居」ちう（居住）する也。人間はくわご（過去）のとか（科）ふぎ（不義）」によつて今生にてもふ念（妄念）あり。いかな」国王大じん（臣）、大名かうけ（高家）、貴賤上下、そうそく（僧俗）男女、しょさけれるな」おもひ願い有りて、くちなうかる

るゆ」へにならく（奈落）にしつむ（沈む）なり。たひし」やくて（3）ん（帝釈天）は庚申を待人の名を印、」えんま（閻魔）王につけて（告げて）いわく、とうりて」しやうのしやうしゆ也。けんとう後世」のしよくわん（諸願）かなえんとちかひた」もふ也。えんま（閻魔）王是を聞きたまひてたつときかなよきかなと三度らひ」はひ（礼拝）したもふ也。かかるゆへにかう」しんを待時は、南方に向てかかげ」いて、明るみのおんじき（飲食）へわし（和紙）等」をそなひ可申也。夜半にまろき（丸き）物」をそなひ、暁にはせき飯（赤飯）をそなひ」飯物酒などをそなひ可奉者也。」かうしんの夜は、男女のかうごう（媾合）も」なくけんとう（現当）のしよくわん（諸願）をかなひ」たまへときねんずへし。よくよく惣」心を（4）おこす事なかれ。ぼさつ（菩薩）となり」たまふへき也。かうしん待人は六地」獄のくるしみをのかるる（逃るる）也。はしめ」には（初めには）して（死出）の山、二つに三途の川、三つには」むけん（無限）地獄、四つにはがきとう（餓鬼道）、五つには畜」生道、六つにはしゅらとう（修羅道）のく（苦）をの」かれ、仏くわ（仏果）にいたる事うたかひ（疑い）」なしと云々。

さる酉の時はあひせん（愛染）、いぬい（戌亥）の時はま」りしてん（摩利支天）、子丑の時はやくし（薬師）、とらう（寅卯）」の時はたひしゃくの天（帝釈の天）よりくたり（下り）た」まいて此人の名をしるしたもふ也。」又いわく、夜半にはしゃか（釈迦）如来、青」面金剛念ずべし。暁には阿みだ（弥陀）」如来、六くわん（5）おん（観音）可奉念。是みな三界」衆生をとりわけあわれみたもふ」本尊也。南方にむかひて三十三度」礼拝可致、一切経七千余くわん（巻）の」かうしんきゃう、かやうにときたもふ」也。きせん（貴賤）上下そうそく（僧俗）男女きら」いなく此法を能々奉待者は、一門けん」そく（眷族）家内あんのん（安穏）、子孫繁昌即」災ゑん（延）命、福寿ゑんまん（円満）うたがひ」なしと云々。ことに田畑能也しつ」ならさるこなし歌に

しやらきら　ひねやさらねや　わがとこに
ねたれそねんそ　ねんそねたれそ
庚申（かのえさる）　おおさるこさる中のさる
おとのさるには　まさるさるかな

（6）

此歌を三べんとなひて我かは（歯）をつ」きつぎと三度くひ合すれは、きぢん」はなそれをなしてへりふり。しやうじん（精進）」は、前日より四足二足、五ぢん（五辛）をくらわ」ず。かうしんの夜は少もいねるへから」す。たとひちうふく（調伏）なくとも一」度待ても申よりおなしくは三年」の間一度もけたひ（懈怠）なくまつへし。三」年の間に十八度待申せは、今生の」諸願は立所に叶ひ、後生は十八地」獄のくるしみをのかれ申すなり。かうしん」待人はいかなそれぞれにしたかひ、米」銭おしまづ、夜に三度のく物（供物）（7）をそなひ」れは、是則くわけんとふ三世のきゃくしゅ（逆修）と」也。来世はぞうばひ（層倍）にて請故也。」

八専曰　」
諸行無常　是生滅法」
生滅々己　寂滅為楽」

しんじん（信心）けんこ（堅固）にして百へん（遍）も千」へんもとなひ可奉。すなわち三病をの」がれる也。三病とはらひ（癩）病、くち病、うへ」病をのかるなり。其外火難、とう」そく（盗賊）、かうてき、しゅそ、てうぶく、　あひ　」もろもろの病難をのかれ

る也。此むねよ」くよく国々へひろめ給へ。てんじく（天竺）唐」にても此法をもつはらに（専らに）しんかう（信仰）する」也。さ（8）れとも童子帰りたまひて、うし寅」にあたつて天より声有て、今のおしいを」聞くや否やと、さもおそろしくきこゆ也。」それより民部そうづ（僧都）諸国へひろめたもふ」也。年中に六度八専有、此間ほんてん」にて大ほうし有る也。八専に入日かうしん」あれは、此日とうりてんにて御せつほう（説法）」ある故え、下かひの大小のじんき三宝の」諸天此法事をちやううもんしたもの故に、」天暦正外道は道にあつてつかひを待、」諸あくねんを以もふねんをきやさる」也。上下万民ともにくもづ（供物）をそなへ可」奉待者也。庚申の夜は食物を」おしめはひん（貧）になり。あるひは火難にあふ」ことあり。少しもねることなかれ。三年の間」くもつ（供物）（9）くやう（供養）もろもろのせんこん（善根）にもす」くれたるもの也。随てしんじん（信心）しやうしやう（上々）」にして奉待は一切諸願成就、皆」りやう満足（皆令満足）うたかひなし。能々」しんぢんを致可奉待者也。」

敬白」

後の世をきけはとうきに
　　にたれとも
しらすやその日も
　　けふになりけり

文化十三年
子十一月廿八日　写之

（10）

（註）

（1）ぬめひろし『秋田農民夜話』秋田文化出版社（一九七八年）

（2）斎藤壽胤「庚申縁起と庚申信仰（一）」『伝承拾遺』第五号（一九八四年）、「庚申縁起と庚申信仰（二）」『伝承拾遺』第六号（一九八五年）、「絵図入『庚申縁起』考」『青面金剛と庚申信仰』町田市立博物館図録第九二集（一九九五）

（3）藤田栄子『秋田市の庚申信仰』秋田文化出版社（一九八八年）、『庚申』秋田文化出版株式会社（一九九四年）

（4）窪徳忠『庚申信仰の研究』（上）原書房（一九八〇年）

（5）前掲書（註3）藤田栄子『秋田市の庚申信仰』二〇一頁